貧困家庭支援 無料で夕飯

ご近所を満腹に「こども食堂」

世田谷のグループ 地域が差し入れ・寄付

スタッフが忙しい中、会話をする子どもたち＝東京都世田谷区で

日本では今、子どもの六人に一人が貧困状態にあるとされる。ひとり親家庭では、親が夜遅くまで働いても収入が少なく、豊富な食事を与えられない子どもも多い。そんな子どもたちが一人で来て、無料で夕飯が食べられる「せたがやこども食堂・みっと」が、東京都世田谷区にオープンした。地元の女性グループが月一回運営し、子どもたちは大家族のような温かな雰囲気の中、食事を楽しんでいる。

（小形佳奈、写真も）

この日のメニューはハンバーグ、サラダ、コーンスープ、漬物やパウンドケーキは近隣住民からの差し入れだ。小学校高学年の男の子二人にはロールキャベツにして、十一月下旬、食卓を囲んでメンバーと子どもたちの会話が弾んだ。

「ご飯ができるまで待っててね。待って食べるご飯はおいしいよ」「次のおせんの具はロールキャベツにして」。十一月下旬、食卓を囲んでメンバーと子どもたちの会話が弾んだ。

この日のメニューはハンバーグ、サラダ、コーンスープ、漬物やパウンドケーキは近隣住民からの差し入れだ。小学校高学年の男の子二人には、メンバーが「はい、座って食べようね」と促した。

こども食堂は毎月第二・第四木曜日の午後二時から八時まで、緊急世田谷直撃松原駅近くで開く。運営メンバーは、親睦サークルや農業活動などを通じて知り合った五十～六十代の女性六人。「子どもの貧困を身近で知り、目の前の子どもたちを助けようと思った」と代表の村上由美さんは言う。

食事前には、区内の日大文理学部の学生が、子どもたちの遊び相手をし、勉強を教える。高校生までの子どもや保護者らの利用を想定しており、夕食は高校生まで無料、大人三百円。食事名の「みっと」は「みんなで、一緒に、楽しく、食べよう」の頭文字「ロールー」から名付けた。

開設に先立ち、近くの小学校二校、中学校一校、高校一校を通じチラシを配布して来場を呼び掛けたところ、十一月十二日の初日は子ども二十四人、大人十六人が訪れた。親子連れ、中学生の友達同士、保護者同伴の姿も見られて二人で来た小学低学年の男子もいたという。

世田谷区は比較的富裕な地域とされる。「でも、給食以外はなかなか口にできない、ひとり親の低所得が激増している」と、地区の主任児童委員民生委員の子どもはいる」と、地区の主任児童委員民生委員の子さん。チラシを配った学校の校長からも「学校は家庭の状況まで踏み込めない。地域で支えてくれるのはありがたい」と期待されているという。

食材は寄付や差し入れなどでまかなっている。「地域の大人や近隣の商店を巻き込みながら、子どもたちが安心して楽しめる場所を目指したい」と村上さんは話す。

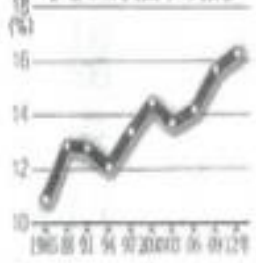
せたがやこども食堂・みっとへの問い合わせは、メール＝setagaya@gmail.com へ。

子どもの貧困率

ひとり親世帯の54%に

厚生労働省の調査では、二〇一二年時点で半数以下所得が一般的な水準の半分以下しかない世帯の十八歳未満の子の割合は16・3%で、六人に一人に当たる。最近二十年で約3・5%増えている。ひとり親世帯など大人が一人の世帯では、この貧困率が54・6%に跳ね上がる。

子どもの貧困は進学との関連も高く、生活保護世帯の子どもの高校進学率は91・1%で全体より7%低い。大学や短大などへの進学率は31・7%で、全体の半分以下となっている。



貧困状態にある子どもに食事を提供する「こども食堂」や無料学習支援は市民グループなどの手で各地に広がりつつある。バッケージ不良や賞味期限外などの理由で売り物にならない食品を企業などから寄付してもらい、生活の苦しい家庭に届ける「フードバンク活動」に取り組む団体も増えている。

一方、政府が子どもの貧困対策の目玉として始めた「子供の未来応援基金」は、募金開始の十月から約二カ月間で目標から乖離した額に止まっている。